

# VP 数量詞のホスト名詞の決定要因について

## 一 三格名詞句補部と二格名詞句補部の比較から一

佐藤 香織

キーワード：イベント、範疇、確定性、構造的距離、命題

### 1. はじめに

本稿では、Ishii(1999)及び石居(2003)で提案された「VP 数量詞<sup>1</sup>」がイベント補部<sup>2</sup>を含む文に現れた場合に、文中のどの名詞が「VP 数量詞」と関係を持つことが出来るかについて考察する。「VP 数量詞」とは、ホスト名詞との相互 c 統御条件(Miyagawa,1989)に従わない副詞的な遊離数量詞のことであり、その解釈は複数事象の解釈に限られる。本稿では、このような数量詞について Ishii(1999)及び石居(2003)にならって、「VP 数量詞」とよぶことにする。(1)に例を示す。

(1) これまでに学生がこのピアノを 5人持ち上げています。(石居, 2003)

(1)は、「ピアノを持ち上げる」という出来事が複数回起こった結果として、「ピアノを持ち上げた学生」の総数が「5人」になったということを示している。つまり、VP 数量詞が述語を分配的に量化した結果として、間接的に「学生」＝「5人」という解釈が得られるということである。本稿では「学生」のような、VP 数量詞が間接的に量化する名詞を VP 数量詞の「ホスト名詞」と呼ぶ。

本稿では、VP 数量詞が(2)(3)のようなイベント補部を含む文に現れた場合を考える。この場合ホスト名詞になりうる要素に何らかの制限があるように見える。

(2) a. 市民運動家たちがこの2ヶ月で政府に[難民の受け入れ]を 30人要請した。

b. ? \*市民運動家たちがこの2ヶ月で政府に[難民の受け入れ]を 30人要請した。

<sup>1</sup> Ishii(1999)及び石居(2003)では、日本語の遊離数量詞には、それが修飾する名詞句と構成素を成す場合(NP 数量詞)と、述語を修飾する副詞的な働きをする場合(VP 数量詞)との2つが混在していると、前者には意味的な制限がないのに対して、後者には複数事象の解釈を許すような総数のみを問題とする解釈に限られるとしている。また VP 数量詞を含む文の場合、「これまでに」などの複数事象の文脈を加えた場合、より自然な文になると述べている。また、VP 数量詞と「一回」などの頻度を表す副詞とを本稿では区別して考える。これらの共通点及び相違点については佐藤(印刷中)を参照。

<sup>2</sup> 本稿でのイベント補部とは、基本的にイベント名詞(event-nominal)を主要部とする補部名詞句のことを指す。イベント名詞とは、「採用」「販売」などの出来事を表す名詞で項構造を持つ名詞のことである。この定義は Kikuchi(1994)に従っている。

- (3) a. \* 議員がこの2ヶ月で[難民の受け入れ]に30人賛成した。  
b. 議員がこの2ヶ月で[難民の受け入れ]に30人賛成した。

VP 数量詞はホスト名詞と構成素を成さないものであるので、(2)の場合、ホスト名詞の候補としては、補部名詞句内部の要素である「難民」と、主文の主語の「市民運動家たち」の2つが考えられる。また意味的に考えた場合も、「受け入れ」を複数回「要請した」結果、「難民」の総数が「30人」になったという解釈と、要請した「市民運動家たち」の総数がついに「30人」になったという解釈の両方が、現実世界では可能である。しかし、実際にVP数量詞「30人」のホスト名詞となりうるのは、「難民」である。また、(3)では逆に主文の主語である「議員」が、ホスト名詞として解釈され、補部名詞句内部の要素である「難民」をホスト名詞として解釈することはできない。現実世界では、「この2ヶ月間」何度も「難民の受け入れ」をどうするかについて「議員」が意見を求められ、その都度「議員」が賛成した結果、受け入れを賛成された難民の総数が「30人」になったという状況もありうるが、「難民」の総数が「30人」になったという解釈は許されないのである。

本稿では(2)(3)のような、VP数量詞のホスト名詞がどのように決定されているのかという問題について、(2)の「要請する」のようなヲ格をとる補文動詞の補部と(3)の「賛成する」のようなニ格をとる補文動詞の補部の性質を比較しながら考察する。

## 2. 先行研究

本節では、(2)や(3)で挙げたような問題については、高見(1998)及び高見・久野(2002)や、三原(1998)などの考え方では説明しきれないことを述べる。なお、これらの先行研究では遊離数量詞をIshii(1999)及び石居(2003)のように2分類する考え方はとっていないので、本節ではVP数量詞についても単に「数量詞」または「遊離数量詞」と呼ぶことにする。

### 2.1 高見(1998)及び久野・高見(2002)

高見(1998)及び高見・久野(2002)は、Miyagawa(1989)の相互c統御条件の反例を多く挙げ、数量詞遊離について機能論的な分析を行っている。そして、次のような制約を提案している。

#### (4) 数量詞遊離に課される機能論的制約

- ①文中のある名詞句が、その文の主題として機能することができる場合にのみ、その名詞句は数量詞遊離を許す。
- ②数量詞遊離は、日本語の文の情報構造—文中の要素は重要度の低い旧情報から重要度の高い新情報へと配列され、動詞の直前に最も重要度の高い情報が置かれる—を遵守する形で行われなければならない。

つまり、「遊離した数量詞が強調され、その文で重要度の高い情報になれば、数量詞遊離文が適格になる」ということである。高見(1998)では、(2)(3)のような属格名詞句からの数量詞遊離に関しても(4)の制約で説明できると述べている。

- (5) a. 山田先生が、学生の発言を3人制した。  
b. その学生は、山田先生が発言を制した。 (高見, 1998)

(5)では、(5a)の名詞句「学生」の主題化が(5b)のように可能であるため数量詞遊離が可能になるという説明である。しかし、(2)(3)に関してはこの制約が当てはまるとは言えない。(6)は、(2)(3)の文を(5b)のように主題化したものである。

- (6) a. その難民は、市民運動家たちが政府に受け入れを要請した。  
b. その難民は、議員が受け入れに賛成した。

どちらも「難民」という名詞句を主題化することが可能であるので、どちらの文も数量詞が「難民」と関係を持つことが可能であると予測されるが、実際は(3)の数量詞は「難民」を表すことは不可能である。したがって、高見(1998)及び久野・高見(2002)の制約は、(2)(3)の違いに関しては明確な説明を与えることができないと考えられる。

## 2.2 三原(1998)

三原(1998)は、主語からの数量詞遊離<sup>3</sup>が可能になるためには、「文脈的アスペクト限定」が必要であると述べている。三原(1998)も、Miyagawa(1989)の相互 c 統御条件による説明は妥当性を欠くとしているが、高見(1998)の挙げた制約は、必要条件ではあるが十分条件ではないとしている。

三原(1998)は、次の高見(1998)の例文を挙げて、文中に含まれる時副詞「毎年、最近、今朝」が果たす役割は無視できないと述べ、主語からの数量詞遊離が可能になるためには「時間的限定性条件」が必要であるとしている。

- (7) a. 灘高の生徒は、毎年[vp 東大を 80 人以上受験する]。  
b. 僕はアパート住まいだけど、最近同僚が[vp 家を 4、5 人次々と建てました]。  
c. A: この新刊雑誌売れていますか？  
B: ええ、今朝も学生さんがそれを 5 人買って行きましたよ。 (高見, 1998)

そして、このような「時間を限って観察した結果」のような限定文脈のことを「文脈的ア

---

<sup>3</sup> 三原(1998)では「数量詞連結」という用語が用いられている。

スペクト限定」と呼んでいる。文脈的アスペクト限定の機能を担う要素には、「ついに、最終的に、完全に」などの動作・作用の終了時点を意味する副詞句や、「とも、すべて、まとめて、まで、だけ」などの「数量に関する観察が終了した」ことを示す表現が含まれるとして、次のような例を挙げている。

- (8) a. 研究成果の刊行が待たれていた常温核融合の研究者がついに 3人論文を発表した。
- b. 優秀な修士論文を書いた学生が、最終的には 3人、博士後期課程に進学した。
- c. この団地では、B棟の住人が8人とも高校の先生だ。

そこで、(2)(3)に文脈的アスペクト限定の機能を担う要素であるとされる「だけ」を加えてみる。三原の主張が正しければ、文脈的アスペクト限定を加えた(9a)(9b)は、どちらも主語と数量詞が関係を持つことが可能になるはずである。

- (9) a. 市民運動家たちがこの2ヶ月で政府に[難民の受け入れ]を 30人だけ要請した。
- b. 議員がこの2ヶ月で[難民の受け入れ]に 30人だけ賛成した。

しかし、実際には「だけ」を加えても、(9a)の主語「市民運動家たち」がホスト名詞となる解釈よりも、補部内部の「難民」がホスト名詞となる解釈のほうが優勢であることが分かる。

このように、高見(1998)及び高見・久野(2002)、三原(1998)の説明では、(2)(3)のようなイベント補部を含む文において、数量詞のホスト名詞として何が選択されるかについては、明確な説明を与えられないことを示した。だからといってこれらの説明が否定されるわけではもちろんないが、(2)(3)のようなイベント補部を含む文においては、これらの条件は、構造的あるいは意味的な部分での何らかの条件を満たした上でのものなのではないかと本稿では考える。

### 3. ヲ格補文動詞の補部

本節では、(2)の「要請する」のようなヲ格補文動詞を含む文中にVP数量詞が生じた場合に、VP数量詞のホスト名詞がどのように選択されるかについて観察する。

#### 3.1 CP補部の場合

まず、補部が「と」節や「ように」節などのCP<sup>5</sup>である場合を考える。補部がCPの場

<sup>4</sup> 高見(1998)及び久野・高見(2002)においては、数量詞に「だけ」「も」「しか」「とも」のような強調を表す副詞がつくと、より重要度が高い情報となるため許容度が上がるとされている。

<sup>5</sup> 本稿では「こと」節をCPとは考えない。理由は、佐藤(2002)でも述べたように「こと」節補部とNP補部はVP数量詞との関係においては、同様の振る舞いをするためである。

合、補部内部の要素は VP 数量詞のホスト名詞となることはできない。そのため、主語が複数読みが不可能な定名詞であるときは、ホスト名詞となるべき要素が文中に存在しないため(11)のように非文になる。

(10) 主語が不定名詞の場合

- a. これまでに学生が警官に[小学生たちを殴った]と 5人白状した。
- b. これまでに NGO のメンバーが政府に[難民を受け入れるように]3人頼んだ。
- c. 商店街にいた人々が捜査本部に[犯人たちがワゴン車で逃走した]と 10人知らせてきた。

(11) 主語が定名詞の場合

- a. \* これまでに太郎が警官に[小学生たちを殴った]と 5人白状した。
- b. \* これまでに太郎が政府に[難民を受け入れるように]3人頼んだ。
- c. \* 太郎が[犯人たちがワゴン車で逃走した]と 10人知らせてきた。

このように、補部が CP の場合は補部内部の要素と VP 数量詞が関係を持つことが一切できないため、補部内部の要素がホスト名詞として選択されるためには、まず NP 補部でなければならないという範疇の制限が存在することが分かる。

### 3.2 NP 補部の場合

それでは補部が NP 及び「こと」節の場合はどうだろうか。佐藤(2002)では、補部が「実現が未確定なイベント」<sup>6</sup>を表す動詞の場合には VP 数量詞と補部の要素が関係を持つことができるが、「実現が確定されたイベント」<sup>7</sup>を表す場合には VP 数量詞と補部の要素が関係を持つことができないことを示した。例文を(12)(13)に示す。

(12) 補部が「実現が未確定なイベント」を表す場合

(決める、約束する、申し出る、断る、計画する、頼む、命じる、勧める、など)

- a. 社長がこれまでに太郎に[社用車の購入]を 3台頼んだ。
- b. 校長がこの2ヶ月で[学生の入学]を 20人断った。
- c. ?教授がこれまでに太郎に[論文を書き直すこと]を 3本命じた。

<sup>6</sup> 「実現が未確定なイベント」とは、基本的にはコントロール述語の補部であり、「こと」節で表した場合に、補文末に「スル」形しか許されないイベントである。(佐藤, 2002)

(i)a. 太郎は教授に[論文の訂正]を約束した。

b. 太郎は教授に[論文を訂正 (する/\*した/\*している/\*することにしたこと)]を約束した。

<sup>7</sup> 「実現が確定されたイベント」とは、基本的には非コントロール述語の補部である。これらの補部は、「こと」節で表した場合に「こと」節内部に「シタ」形、「シテイル形」が現れることが可能である。(佐藤, 2002)

(i)a. 太郎は教授に[論文の訂正]を伝えた。

b. 太郎は教授に[論文を訂正 (する/した/している/することにした) こと]を伝えた。

- (13) 補部が「実現が確定されたイベント」を表す場合  
(知らせる、打ち明ける、報告する、告げる、伝える、話す、教える、白状する、など)
- a. \*社長がこれまでに太郎に[社用車の購入]を3台知らせた。
  - b. \*校長がこの2ヶ月で[学生の入学]を20人打ち明けた。
  - c. \*教授がこれまでに太郎に[論文を書き直したこと]を3本報告した。

上記の(12)(13)の補部イベントは、主文のイベントと補部イベントに時間的な差があるのが特徴である。「実現が未確定なイベント」は、発話時において「まだ実現されるかどうか確定されていないイベント」であり、「実現が確定されたイベント」は主文の表すイベントよりも先に成立しているか、「今後の実現が確定されているイベント」である。しかし、ラ格補文動詞の表す補部には次の(14)のように主文と補部の表すイベントに時間的に差がないもの<sup>8</sup>も存在する。

- (14) 補部イベントの成立が主文イベントの成立と同時である場合
- a. 太郎が[犯人の脱出]を手伝った。
  - b. 刑事が[難民の入国]を目撃した。
  - c. 花子が[学生の発表]を聞いた。

そこで本節では、(12)のタイプを①、(13)のタイプを②、(14)のタイプを③として、それぞれ VP 数量詞のホスト名詞がどのように決定されているかを見ていく。

### 3.2.1 主文主語、補部内部の要素がどちらも不定名詞の場合

まず、主文主語と補部内部の要素がどちらも不定名詞の場合に、VP 数量詞のホスト名詞となるのはどの名詞か、補部イベントのタイプ別に見ていく。すると①③では補部内部の要素が優先的に選択されるのに対して、②では逆に主文の主語のみがホスト名詞になる。ただし①③の場合、主文の主語が絶対にホスト名詞として選択されないというわけではなく、現実世界の状況によって主文の主語がホスト名詞として解釈されることもありうる。

- (15) ①補部が「実現が未確定なイベント」を表す場合
- a. 政府委員がこれまでに NGO に[難民の受け入れ]を3人約束した。
  - b. 役員たちがこれまでに人事課に[エンジニアの採用]を4人命じた。
  - c. ?役員たちがこれまでに[派遣スタッフを入れること]を5人決めた。

---

<sup>8</sup> これらの動詞は「こと」節ではなく「の」節や「ところ」節をとり、いわゆる主部内在型関係節として分析することも可能であると考えられるが、本稿では紙幅の都合上、この問題には立ち入らない。

- (16) ②補部が「実現が確定されたイベント」を表す場合
- これまでに秘書が警察に[役員の詐欺]を 3人白状した。
  - 女子学生がこれまでに[教授のセクハラ]を 3人打ち明けた。
  - ?リポーターがこの2日間で[民間人が死亡したこと]を 5人報道した。
- (17) ③補部イベントの成立が主文イベントの成立と同時にである場合
- ?係官たちがこれまでに[難民の入国]を 30人目撃した。
  - ?教育委員たちがこの1週間で[教師の発表]を 20人聞いた。

### 3.2.2 主文主語が定名詞で補部内の要素が不定名詞の場合

次に、主文主語を複数読みの不可能な定名詞に変え、ホスト名詞の候補を補部内の要素のみにすると、②は非文になる。一方、①と③は補部内部の要素のみがホスト名詞になる。特に③は(17)と比較すると許容度が上がることが分かる。

- (18) ①補部が「実現が未確定なイベント」を表す場合
- ブレア首相がこれまでに陸軍に[イラクへの兵士の派遣]を 200人命じた。
  - 鈴木校長がこれまでに[交換学生の入学]を 20人許可した。
  - ?太郎がこれまでに店長に[派遣スタッフを入れること]を 5人勧めた。
- (19) ②補部が「実現が確定されたイベント」を表す場合
- \*太郎がこれまでに警察に[役員の詐欺]を 5人知らせた。
  - \*花子がこれまでに[教授のセクハラ]を 3人打ち明けた。
  - \*佐々木記者がこれまでに[民間人が死亡したこと]を 5人報道した。
- (20) ③補部イベントの成立が主文イベントの成立と同時にである場合
- 太郎はこれまでに[難民の入国]を 30人目撃した。
  - 教育委員の次郎はこの1週間で[教師の発表]を 20人聞いた。

### 3.2.3 主文主語が不定名詞で補部内部の要素が定名詞（あるいは一致する要素がない）の場合

最後に、主文主語が不定名詞で補部内部の要素が複数読みの不可能な定名詞（あるいは一致する要素がない）の場合だが、この場合ホスト名詞の候補は主文主語のみである。この予想通り、①②③ともホスト名詞は主文主語である。

- (21) ①補部が「実現が未確定なイベント」を表す場合
- 市民がこの2ヶ月で市役所に[市民税の減免]を 300人頼みに行った。
  - これまでに市議会議員が市長に[市庁舎の建て直し]を 3人勧めてきた。
  - 学生たちがこれまでに[行方不明の太郎の搜索]を 5人決意した。

(22) ②補部が「実現が確定されたイベント」を表す場合

- a. これまでに秘書が帳簿の改ざんを2人白状した。
- b. この2ヶ月間で社員が社長のセクハラを3人訴えた。
- c. 学生が鈴木先生に本屋での万引きを2人打ち明けた。

(23) ③補部イベントの成立が主文イベントの成立と同時である場合

- a. 学生たちが太郎の脱出を5人手伝った。
- b. 市民が太郎の逃走を20人目撃した。

3節での観察の結果をまとめると、①③の場合は、補部内にVP数量詞と一致するような不定名詞が存在するときには、それが優先的にホスト名詞として選択される。一方、補部内にそのような不定名詞が存在しないときは、主文主語が不定名詞であれば主文主語がホスト名詞として選択される。つまり①③の場合は、基本的にVP数量詞と構造的な位置に近い不定名詞がホスト名詞として選択されるということが分かる。しかし、②の場合はそのような条件においても、補部内部の不定名詞がホスト名詞として選択されることはない。

#### 4. 二格補文動詞の補部

本節では、(3)の「賛成する」のような二格補文動詞を含む文中にVP数量詞が生じた場合に、VP数量詞のホスト名詞がどのように選択されるかについて観察する。

##### 4.1 二格補文動詞の補部の性質

本稿で扱う二格補文動詞とは(24)のようなものである。

(24) 賛成する、反対する、賛同する、抗議する、抵抗する<sup>9</sup>、など

- a. 役員たちが[若手研究員の採用]に賛成した。
- a'. 役員たちが[若手研究員を採用 (する/した/している) こと]に賛成した。

これらは名詞句補部と「こと」節補部が可能であるが、ヲ格補文動詞との大きな違いが存在する。それは、二格補文動詞の補部が「命題」を表す点である。「命題」をどのように規定するかについてはまだ考察の域を出ないが、本稿では次のテストによって「命題」と「実現が確定されたイベント」「実現が未確定なイベント」とを分けて考える。(24)の名詞句補部は(25a)(25b)のような「命題」を表す名詞節に置き換えることができる。しかし「事実」「真実」のような名詞とは置き換えることができない。

<sup>9</sup> これらの二格動詞は、次のように直接受動文にすることが可能であるので杉本(1991)の「準他動詞」に相当する。

(i)a. 市民は市長の意見に賛成した。  
a'. 市長の意見は市民に賛成された。



- (25) a. 役員たちが [若手研究員を採用するという (考え/意見/案)] に賛成した。  
 b. 役員たちが [ (社長が) 若手研究員を採用したという行動] に賛成した。  
 cf. \*役員たちが [ (社長が) 若手研究員を採用したという (事実/真実) ] に賛成した。

一方、「実現が確定されたイベント」をヲ格補文動詞が表す場合、「事実」「真実」のような名詞を用いた名詞節への置き換えが可能である。ただし、(25)のような「命題」を表す名詞を用いた名詞節への置き換えも可能になる場合がある。

- (26) a. 秘書が [役員が帳簿を改ざんしたという真実] を白状した。  
 b. その記者は [民間人が死亡したという事実] を報道した。  
 cf. 政府報道官は [消費税を 5%引き上げる案] を発表した。

このことから、「実現が確定されたイベント」という概念の中に「命題」という概念が含まれる可能性があるが、更なる分析は今後の課題としたい。

また、ヲ格補文動詞が「実現が未確定なイベント」を表す場合、(25)(26)のような名詞節への書き換えは基本的に不可能である。

- (27) a. \*太郎が [難民を受け入れるという考え] を約束した。  
 b. \*社長が [新製品を売り出すという事実] を決意した。

## 4.2 VP 数量詞のホスト名詞

4.1 で見たように、ニ格補文動詞の補部とヲ格補文動詞の補部とでは性質に違いが見られた。この違いが、VP 数量詞のホスト名詞の選択にも影響を及ぼしていると考えられる。ニ格補文動詞の場合、VP 数量詞は補部の要素とは関係を持つことは不可能であり、常に補文動詞の主語と関係を持つ。

- (28) a. 役員たちが これまでに [研究員の採用] に 3人 賛成した。  
 b. 市民が これまでに [難民の受け入れ] に 20人 抗議した。  
 c. 学生たちが これまでに [兵士をイラクに派遣(する/した)こと] に 300人 抗議した。

ここで、補文主語を複数読みの不可能な定名詞に変えて VP 数量詞と関係を持つことができなくなるようにしてみる。その場合も、VP 数量詞は補部内部の要素と関係を持つようにはならず、非文法的な文となる。

- (29) a. \*太郎がこれまでに[研究員の採用]に 3人賛成した。  
b. \*太郎がこれまでに[難民の受け入れ]に 20人抗議した。  
c. \*太郎がこれまでに [兵士をイラクに派遣 (する/した) こと]に 300人抗議した。

4 節での観察をまとめると、二格補文動詞を含む文中に VP 数量詞が生起した場合、補部内部にしか VP 数量詞のホスト名詞となりうるような不定名詞がない場合でも、補部内部の要素はホスト名詞として選択されることはないということが分かる。二格補文動詞の場合には、ヲ格補文動詞の場合に見られたような構造的距離による選択は行われていない。

この原因としては、ヲ格補文動詞の補部と二格補文動詞の補部との性質の違いが挙げられる。二格補文動詞の補部のように「命題」を表す補部の場合、文中の VP 数量詞が補部内部の要素をホスト名詞として選択することはできない。佐藤(2002)では VP 数量詞が補部内部の名詞と関係を持つための条件として、補部が「実現が未確定なイベント」でなければならないことを指摘したが、二格補部の場合にもこの条件が当てはまることになる。しかし、「確定性」と「命題」という概念の定義及びこれらの関係については、上述したように更なる分析が必要である。

## 5. 終わりに

本稿では、VP 数量詞がイベント補部を含む文に現れた場合に、どの名詞句をホスト名詞として選択することが可能であるかについて、ヲ格補文動詞の補部と二格補文動詞の補部を比較することで、何が重要な条件となっているかを示した。

まず、ヲ格補文動詞の場合も二格補文動詞の場合も、主文主語をホスト名詞として選択することは可能である。しかし、ヲ格補文動詞の補部のうち、「実現が未確定なイベント」と「補部イベントの成立と主文イベントの成立が同時であるもの」については、主語よりも構造的距離が近い位置にある補部内部の要素が、優先的にホスト名詞として選択される傾向がある。

一方、「命題」を補部とする二格補文動詞の場合、補部内部の要素を VP 数量詞がホスト名詞として選択することは出来ない。またヲ格補文動詞の場合も、(I)補部が NP 及び「こと」節であること、(II)補部が「実現が確定されたイベント」を表さないこと、という条件を満たさないと補部内部の要素をホスト名詞として選択することは出来ない。

VP 数量詞とイベント補部を含む文を考えた場合、確かに Ishii(1999)及び石居(2003)で述べられているように、VP 数量詞は相互 c 統御条件に従わないという点では分布が自由であるが、ホスト名詞を自由に選択できるわけではないことが本稿によって示された。そして VP 数量詞のホスト名詞の選択には、決して機能的な条件だけではなく、上記で挙げたような、構造的距離やイベント補部の意味タイプ（「確定性」「命題」）など、そして範疇の条件などが絡み合っていることを特に強調したい。VP 数量詞のこのような特質が「イ

メント」の量化の体系の中でどのように位置づけられるのか、更に追究していきたい。

また、本稿では「信じる」などの思考動詞について取り上げることができなかった。「信じる」はヲ格をとる補文動詞であるが「命題」を補部にとる動詞である。「信じる」などの思考動詞の補部とその量化についても、合わせて今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 石居康男(2003)「(第3章)名詞句移動」石居康男・西垣内康男『英語学モノグラフシリーズ 13 英語から日本語を見る』pp.51-108, 研究社
- 佐藤香織(2002)「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』2巻2号, pp.112-127.
- 佐藤香織(印刷中)「イベント補部を量化する副詞的数量表現—度数副詞と遊離数量詞の共通性—」『日本語と日本文学』38号, 筑波大学国語国文学会
- 杉本 武(1991)「ニ格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」『日本語のヴォイスと他動性』, pp.233-250, くろしお出版
- 高見健一(1998)「日本語の数量詞遊離について：機能論的分析」『月刊言語』第27巻, 第1号—3号.
- 高見健一・久野暉(2002)「(第8章)名詞句からの外置構文と数量詞遊離構文」『日英語の自動詞構文』pp.395-434, 研究社
- 三原健一(1998)「数量詞連結構文と「結果」の含意」『月刊言語』第27巻, 第6号—8号.
- Ishii, Yasuo (1999) A Note on Floating Quantifiers in Japanese. *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp.236-267. Tokyo: Kaitakusha.
- Kikuchi, Akira (1994) Extraction from NP in Japanese. *Current Topics in English and Japanese*. pp. 79-104. Tokyo: Hituzi Shobo.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.